

理論と実践をつなぐ：
日本の英語教職課程における Global Englishes の視点の導入

**Bridging theory and practice: Implementing Global Englishes Perspectives
in a Teacher Education Course in Japan**

藤原康弘（名城大学 外国語学部）

FUJIWARA, Yasuhiro, *Faculty of Foreign Studies, Meijo University*

要約

本研究は、日本の英語教育における英語観の変遷にふれた上で、筆者が担当する教員養成課程に在籍する大学生の間で Global Englishes に対する受容が高まりつつあることを示す。研究手法として、国際英語論、近年では Global Englishes for Language Teaching (GELT) として知られるパラダイムに基づくコースにおける 10 年以上の指導経験を基盤とし、学生からのフィードバックに対する綿密な質的分析を実施した。

本研究では、World Englishes (WE) および English as a Lingua Franca (ELF) に対する学生の態度の変化に焦点を当てている。分析の結果、学生たちの間で多様な英語変種に対するより開放的な姿勢が醸成されつつあることが示唆された。この知見は、日本の英語教育において、従来のネイティブスピーカー主義からの重要なパラダイムシフトが起こりつつある可能性を示唆している。

This study explores the evolving perspectives on English language in English language teaching and demonstrates an increasing acceptance of Global Englishes among university students enrolled in the teacher training program taught by the author. The research methodology is grounded in over a decade of teaching experience in courses based on the World Englishes paradigm, recently known as Global Englishes for Language Teaching (GELT). A detailed qualitative analysis of student feedback was conducted. The study focuses on changes in students' attitudes towards World Englishes (WE) and English as a Lingua Franca (ELF). Analysis results suggest a growing openness among students towards diverse varieties of English. This finding suggests a potentially emerging paradigm shift in English education in Japan, gradually moving away from the traditional native speaker-centric approach.

キーワード: global Englishes, English as a lingua franca, world Englishes, ネイティブスピーカー主義、教職課程

1. はじめに

英語の世界的な普及に伴い、World Englishes (WE)、English as an International Language (EIL)、English as a lingua franca (ELF) というパラダイムが発展してきた。これらのパラダイムは、英語教育における従来のネイティブスピーカー規範に挑戦し、英語教育における新た

な視座を提供するものである（各パラダイムの概要については、Hino, 2001、藤原 2014、Rose & Galloway, 2019、柴田・仲・藤原, 2020 を参照）。日本では、歴史的に英語教育の主流はネイティブスピーカー、特にアメリカ英語のモデルを重視してきた（Hino, 2018）。しかし、以下で詳述するように、近年、英語の多様な使用状況に対する認識が高まり、英語教育においても上述の国際英語論の視点を取り入れる動きが見られるようになっている。

本論文の主たる目的は、こうした変化が教員志望の学生の態度にどのように反映されているかを、金城学院大学で実施されている GELT（Global Englishes for Language Teaching）のコースを通じて検討することである。学生のフィードバックを質的に分析し、近年の学生たちが WE や ELF の概念を受け入れる傾向にあることや、ネイティブスピーカリズムから脱却しつつあることについて論じる。

2. 研究背景

2.1. 英語教育におけるネイティブスピーカー主義

ネイティブスピーカー主義の初出は Holliday (2005, p. 6) であり、「『ネイティブスピーカー』の教師が『西洋文化』を代表し、英語と英語教育の理想を体現しているとする信条」（原文は“the established belief that 'native-speaker' teachers represent a 'Western culture' from which spring the ideals both of the English language and of English language teaching methodology.”）と定義されている。この概念は、英語教育におけるネイティブスピーカーと非ネイティブスピーカーの間に二項対立と緊張を生み出し、非常に強い影響を及ぼしてきた（ネイティブスピーカー主義に関する最近の研究レビューについては、Hiratsuka, 2024 を参照）。ネイティブスピーカー主義は、英語のネイティブスピーカーが言語能力の理想のモデルであるという信念であり、教科書の内容や言語評価において、ネイティブに近い発音や文法、話し方、さらには非言語的表現を絶対視する傾向に見ることができる（その批判的検討については、藤原, 2007, 2014, Fujiwara, 2020 を参照）。

2.2. グローバル英語（Global Englishes）と教育的意義

一方、Global Englishes は、英語が世界の多様な話者によって形成された複数の変種を持つ言語と捉える別（alternative）の視点を提供する。GELT のパラダイムは、WE、EIL、ELF、批判的応用言語学を取りまとめ、「英語」を単一のものと捉える考え方を批判している（Rose & Galloway, 2019; Rose, McKinley & Galloway, 2021）。このパラダイムシフトにより、我々は英語が、善かれ悪しかれ、国際共通語としての役割を果たす現実をより包括的に理解することができる。

こうした国際的な動きに対応して、日本の文部科学省もカリキュラムのガイドラインで「世界の英語の多様性を認識すること」の重要性を強調し始めている。例えば、『高等学校学習指導要領解説 外国語編（英語）』（文部科学省, 2018）では、現代の英語が国際的なコミュニケーションの手段として広く使われ、多様な語彙、綴り、発音、文法などの特徴を持つことを認識させる指導の重要性が強調されている（文部科学省, 2018, p. 133）。

このような背景から、英語教員養成プログラムのコアカリキュラムでは、「国際共通語としての英語」の概念が英語史の領域の中の「コア」に含められている（東京学芸大学, 2017）。これらの世界的なトレンドと日本の教育政策から見て分かるように、GELT に関連する要素を英語教育に取り入れる必要性は高まりつつある。

上記の背景をふまえて、本論文では、筆者が実施している GELT コースを紹介し、コースに対する学生のフィードバックを質的に分析してその印象を探る。

3. 研究手法

3.1. GELT コースの概観と目的

筆者の提供する GELT (Global Englishes for Language Teaching) コースは、2011 年に愛知教育大学で始まり、現在は金城学院大学で提供されている。本コースの目的は、教員志望の学生に世界における「英語」の包括的な理解を提供することである (本 GELT コースの初期の内容については、藤原 2015 を参照)。このコースでは、WE や ELF といった主要な概念を学生に紹介し、従来のネイティブスピーカーモデルを批判的に検討し、日本の英語教育の実践を再考することを奨励する。カチュル (Kachru, 1985) の内円、外円、拡大円に基づく英語の多様性、理解可能度 (intelligibility) の問題、ELF 研究、英語教育法、コミュニケーション能力の評価、批判的応用言語学の視点からのグローバルなコミュニケーションにおける英語の役割など、幅広いトピックを取り扱う (Appendix のシラバス参照)。

主な教科書は『英語教育のための国際英語論—英語の多様性と国際共通語の視点から』(柴田・仲・藤原, 2020, 大修館書店) であり、筆者もその共著者である。その書籍をベースとし、国内外の資料も取り入れ、毎年最新の研究を紹介することを心がけている。

このコースの目的の一つは、将来の英語教師が生徒に言語的多様性やグローバルな英語圏コミュニティを理解できるようにすることである。ディスカッション、小テスト、課題、様々な英語アクセントや英語変種の学びを通じて、英語教育におけるネイティブスピーカー規範の絶対的位置を多角的かつ批判的に検討する。

3.2. 研究参与者

本研究の参加者は、2023 年度に当該の GELT コースを履修した英語専攻の女子大学生 8 名である。そのうち 3 名は教職課程に所属していた。コース開始時に実施した簡易的な調査によると、教職課程に所属する 3 名全員が英語教師を目指していた。

彼女たちは、イギリス、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国などの英語圏での数週間から 2 ヶ月程度の滞在、また韓国、台湾、香港などでの短期の旅行や留学経験があった。コース開講時より「英語に対する視野を広げたい」や「国ごとの英語の違いについて学びたい」といったコメントが見られ、クラス全体が World Englishes に対して積極的な態度を示していた。

3.3. 分析

収集したデータは、各クラス終了後に提出されたリアクションシートである。これらのシートの内容をカテゴリごとにコード化し、繰り返し現れるコードや顕著なコードを分類し、コード間で共通する要素が見られる場合、それらを統合して重要な要因を抽出した。分析には、質的研究分析に広く使用されるソフトウェアである *MAXQDA ver. 24* を用いた。本論文では、分析の初期段階で特定された結果の一部を示す。

4. 研究結果

4.1. ネイティブスピーカー規範に対する学生の認識

筆者が実施してきたこの GELT コースの初期段階では、多くの学生がネイティブスピーカーモデル、特にアメリカ英語やイギリス英語に強い好意を示していた。これは、日本における社会的傾向を反映しており、ネイティブスピーカー主義が依然として強く根付いていることを示している (Hiratsuka, 2022, 2024)。例えば、教科書や大学入試では、アメリカ英語の変種が他の英語よりも優先される明確な傾向がある (藤原, 2017; Kawashima, 2019)。2015 年に金城学院大学で本コースが開始された当初、ネイティブスピーカー、特にアメリカ英語の規範を押し付けることが社会に与える負の影響について議論すると、学生が混乱を示すことが珍しくなかった。

しかし、2021 年に共通テストが導入され、アメリカ英語だけでなくイギリス英語や日本出身の話者による英語も含まれるようになった頃から、大きな変化が見られつつある。大学入試センター (2021) は「多様な話者による現代の標準的な英語を使用する」と強調している。その結果、共通テストの模擬試験のリスニング教材には、オーストラリア英語やインド英語の話者の音声などが含まれるようになった。このような社会的な変化が進行する中で、ネイティブスピーカー主義は依然として日本の主流の英語教育に根付いている。

4.2. World Englishes への高まる受容

こうした状況の中、最近の学生からのフィードバックは態度の変化を示している。GELT コースを受講している学生は、いわゆるノン・ネイティブの英語変種に対してより受容的になってきていると言ってよい。2023 年に収集されたリアクションシートでは、授業に出席していた全 6 名の学生が中等教育のリスニング教材にノン・ネイティブの英語変種を含めることに対して肯定的な意見を示した。ある学生は「聞き分けることは難しいかもしれないが、色々な英語話者が世界中にいますので、英語でコミュニケーションを取るためにも必要なことだと思う」と述べた。また別の学生は、「良いと思います」と述べ、共通テストのリスニングセクションに含めるのであれば「ただし慣れる必要があるため、学校の教科書や授業に取り入れて教える必要があると思います」と強調した。

4.3. GELT が発音とコミュニケーションに対する意識に与える影響

さらに、近年のコースの学生は自分自身の「日本語アクセントの英語」に対しても前向きな姿勢を示すようになった。シラバスに示されているように、この GELT コースでは、ネイティブに似た発音よりも理解可能度 (intelligibility) の概念を強調している。具体的には、内円、外円、拡大円からの多様な英語話者のリスニングに焦点を当てた活動を実施している。2023 年には、イギリス、オーストラリア、インド、フィリピン、シンガポール、日本、韓国、中国、ロシア、イタリア、スウェーデン、メキシコ、アラビア、南アフリカなど、幅広い国と地域の話者を取り上げた。『中学校学習指導要領解説 外国語編 (英語)』(文部科学省, 2017) でも推奨されているように、こうした多様な英語変種に触れることは、理解可能度の重要性を学生に認識させ、彼らの英語に対する自信を高める助けとなることが期待される。

コースでは、学生が日本語アクセントの英語を評価する際に理解可能度に焦点を当てるようになり、ある学生は「日本人らしい英語も理解出来るレベルであればいいのではないかと考える」と述べ、別の学生は「ネイティブらしさよりも理解可能度を評価するという点においてとても賛成である」と述べた。これは、TOEFL iBT や CEFR (Council of Europe, 2020) など、理解しやすさとコミュニケーションを重視する方向にシフトしている言語評価の世界的なトレ

ンドと一致している。その結果、学生は自身のノン・ネイティブとしてのアイデンティティを受け入れ、他の英語変種の妥当性を認めるようになっていく。

これらの発見は、この GELT コースを履修した限られた学生の観察に基づくものであるが、効果的なコミュニケーションこそが言語学習の主目標であり、ネイティブらしきではないという認識が広がりつつあることを示している。約 10 年以上にわたり大学で同様のコースを教えてきた際に、「英語の多様性は大事だと思います。でもネイティブスピーカーの英語を追求すべきだと思います」という学生の反応に何度も直面してきたが、この最近の変化は、重要なパラダイムの変化を示している。

5. ディスカッション

5.1. ネイティブスピーカー主義への挑戦

学生の間で WE や ELF に対する受容の態度が芽生えつつあるにもかかわらず、ネイティブスピーカー主義は日本の教育システムや多くの英語教育 (ELT) の状況において依然として根強い。先に述べたように、教科書、教材、評価基準は依然としてネイティブスピーカーの規範を反映している。この状況が続く限り、多くの中学・高校の教師は特定のネイティブ英語話者に強く依存した英語教育を継続する可能性が高い (藤原, 2017)。

Uchida & Sugimoto (2020) が 2015 年に実施した中学校英語教師 100 名への調査では、教室での「発音モデルとして好まれる英語の変種」が問われた。結果として、56% が標準的なイギリス英語/アメリカ英語を支持し、37% が標準的なアメリカ英語、2% が標準的なイギリス英語を選んだ一方、それ以外の変種を選んだのはわずか 5% であった。この結果は、香港における類似の調査で地域の英語変種に対してより肯定的な態度が示された結果と非常に対照的である (Tsang, 2021)。また、若生、松浦、千葉 (2021) の最近の研究では、中学校英語教師 48 名のうち 90% 以上が「中学生に英語の多様性を教えることに賛成だ」との問いに肯定的な回答を示している。この結果は、WE や ELF への意識の高まりを示唆している。しかし、85% の回答者が「検定教科書に多様な英語に関する内容があれば、それを教えることは可能だ」という記述に強く同意しており (つまり教科書に書かれていないと、教えることが困難)、教師や教員養成者がより包括的な英語教育を実施する上での大きな課題を浮き彫りにしている。Rose と Galloway (2019) が指摘するように、地域および国家レベルでの応用言語学者間の意識を高め、徐々に体系的な変革を促進することが重要である。

5.2. 教員養成課程の役割

教員養成は、ネイティブスピーカー主義から Global Englishes の視点へと移行を促進する上で重要な役割を果たすと思われる。筆者が提供する GELT コースのような授業は、将来の教師に対して既存の規範に挑戦し、より包括的な教室を育成するために必要な知識とツールを提供している。学生に多様な英語変種を紹介することで、教員養成者はネイティブスピーカー主義のイデオロギーを解体し、英語に対するより広範な理解を促すことができよう。最近、Hiratsuka (2024) はネイティブスピーカー主義を超えるためのスタンスとして「トランススピーカー主義 (trans-speakerism)」の概念を提案しており、このシフトには高い職業意識に加えて、Global Englishes への深い理解と高度な intercultural awareness が必要であると論じている。

前述の若生ら (2021) の研究では、教育実習生の 67% が中学生に英語の多様性を教えることを支持しており、一人の学生は「英語でコミュニケーションする人々は英語圏の国の出身者に

限られない。異なるアクセントを含む多様な英語に触れさせることは、グローバル社会を生きる上で学生に利益をもたらす」とコメントしている（若生ら, 2021, p. 5）。本 GELT コースのような授業を履修する機会が増えれば、Global Englishes に対するより深い理解を持つ英語教師がより多く輩出されることが期待される。

本研究は、限られた参加者を対象としたケーススタディであり、一部の結果を示しているに過ぎない。筆者は、20 年以上にわたる研究と約 15 年の教員養成における GELT コースの経験に基づき、GELT の視点への顕著なシフトを観察しているが、さらなる分析結果の提示が必要である。今後も研究が進展するにつれ、結果を共有し続けていきたい。

6. 結論

本研究を通じて、GELT コースは学生の英語に対する認識を変え、ネイティブスピーカー主義からの脱却を促進する上で重要な役割を果たしている可能性が示された。学生は英語の多様性を受け入れ、理解可能度を重視する方向へとシフトしている。しかし、ネイティブスピーカー主義は依然として教育現場に強く残っており、その変革にはさらなる取り組みが必要である。

今後の課題としては、GELT の視点をより広く教育現場に浸透させるための具体的な方策を検討することが挙げられる。特に、教科書の内容や教師のトレーニングプログラムにおいて多様な英語変種を取り入れ、教師がその価値を理解し実践できる環境を整えることが重要である。筆者は、科研費のプロジェクト（24K04172）を通して、GELT に基づくアプローチを英語教育や教員養成の場で広めるとともに、GELT を意識する人々をつなぐオンライン・プラットフォームを開発する予定である。このような取組により、日本の英語教育がより現実的で包括的なものへと進化していくことが期待される。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 23K00743 および 24K04172 の助成を受けて実施された。また本稿は『JACET 中部支部紀要』22 号掲載の同タイトルの招待論文を日本語に翻訳したものである。本稿の作成にあたり、文章の校正、および英語から日本語への翻訳の支援のために、ChatGPT-4 および Claude 3.5 という生成 AI ツールを活用した。その後、筆者は確認、および編集を手作業で行っており、当然のことながら、本論の内容の全責任を持つ。

引用文献

- Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment. Companion volume*. Council of Europe Publishing.
- 大学入試センター (2021). 「令和 5 年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」大学入試センター.
- Fujiwara, Y. (2007). Critical language testing on pragmatics tests: Are pragmatics tests really appropriate? *Asian Englishes*, 10(1), 24-42.
- 藤原康弘. (2014). 『国際英語としての「日本英語」のコーパス研究』ひつじ書房.
- 藤原康弘. (2015). 「グローバル時代の英語教師に求められる資質：目標言語の多様性と英語の多様性への気づき」『アジア英語研究』17, 51-74.
- 藤原康弘. (2017). 「自律した日本の英語教育へ：国際英語の視点」藤原康弘・仲潔・寺沢拓敬（編著）『これからの英語教育の話をしよう』（pp. 49-94）. ひつじ書房.

- Fujiwara, Y. (2020). Language testing from the perspectives of world Englishes and English as a lingua franca. *Meijo University Journal of the Faculty of Foreign Studies*, 3, 117-128.
- Hino, N. (2001). Organizing EIL studies: Toward a paradigm. *Asian Englishes*, 4(1), 34-65. <https://doi.org/10.1080/13488678.2001.10801063>
- Hino, N. (2018). *EIL education for the Expanding Circle: A Japanese model*. Routledge.
- Hiratsuka, T. (2022). *Narrative inquiry into language teacher identity: ALTs in the JET program*. Routledge.
- Hiratsuka, T. (2024). *Native-speakerism and trans-speakerism: Entering a new era*. Cambridge University Press.
- Holliday, A. (2005). *The Struggle to Teach English as an International Language*. Oxford University Press
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures* (pp. 11-31). Cambridge University Press.
- Kawashima, T. (2019). Background research on developing teaching materials for listening comprehension in World Englishes. *JACET ELF SIG Journal*, 3, 24-47.
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』 文部科学省.
- 文部科学省. (2018). 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編 英語編』 文部科学省.
- Rose, H., & Galloway, N. (2019). *Global Englishes for language teaching*. Cambridge University Press.
- Rose, H., McKinley, J., & Galloway, N. (2021). Global Englishes and language teaching: A review of pedagogical research. *Language Teaching*, 54(2), 157-189.
- 柴田美紀・仲潔・藤原康弘. (2020). 『英語教育のための国際英語論 — 英語の多様性と国際共通語の視点から考える』 大修館書店
- 東京学芸大学. (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』 東京学芸大学.
- Tsang, A. (2019). Reconceptualizing speaking, listening, and pronunciation: Globalizing TESOL in the contexts of world Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly*, 53(2), 580-588. <https://doi.org/10.1002/tesq.504>
- Uchida, Y., & Sugimoto, J. (2020). Non-native English teachers' confidence in their own pronunciation and attitudes towards teaching: A questionnaire survey in Japan. *International Journal of Applied Linguistics*, 30(1), 19-34. <https://doi.org/10.1111/ijal.12253>

Appendix: 『世界の英語』のシラバス

金城学院大学 シラバス

開講年度(Year)	2024年度	開講科目コード(Course code)	14340301
授業科目名(Course name)	世界の英語		
担当者(Instructors)	藤原 康弘		
開設学部学科(Department)	文学部 外国語コミュニケーション学科	科目分類番号(Course classification number)	253
開講クラス(Class)	英外3	開講形態 (Course format)	講義
科目区分(Course classification)	専門教育科目 専門教育科目	単位数(Credits)	2
開講期・曜日・時限(Semester / Day of the week / Period)	後期 水曜 1 限	担当形態 (Instructor format)	単独
実験実習費 (円) (Experiment/training fee (yen))		履修者数上限 (名) (Maximum number of students)	120

■授業の概要(Course outline)

当授業では英語が国際共通語に至った歴史の経緯とそこに隠された社会的・政治的ねらい、国際社会における英語使用の実情、英語の所有権、英語使用者の区分などさまざまな事柄をディスカッションをふまえて理解します。関連分野であるEIL (English as an international language)、WE (World Englishes)、ELF (English as a lingua franca)、Global Englishes for Language Teaching の研究成果をふまえ、英語という言語を4つの視点—「社会」「個人」「コミュニケーション」「英語教育」から考察を加えていきます。みなさんの言語観、英語観、世界観が広がり、深まることを期待しています。

■到達目標(Course goals)

英語の成り立ちと拡散、地域的な特殊性を理解することができる。

■履修上の留意点(Important points)

■学位授与方針 (Diploma policy)

1. 知識・理解

日本を含む世界の多様な文化を理解するとともに、豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身につけている。

◎

2. 汎用的技能

世界の言語や文化の諸問題についての情報を適正に収集し、さまざまな研究理論を用いて分析し考察することができる。

○

■授業計画(Lesson plan)

- 第1回 : オリエンテーション (English as an international language, World Englishes, English as a lingua franca, Global Englishes for Language Teaching)
- 第2回 : 英語の諸相：世界に広がる英語を概観する (1) 母語話者英語 (Inner Circle) の多様性を理解する
- 第3回 : 英語の諸相：世界に広がる英語を概観する (2) 非母語話者英語 (Outer Circle) の多様性を理解する
- 第4回 : 英語の諸相：世界に広がる英語を概観する (3) 非母語話者英語 (Expanding Circle) の多様性を理解する
- 第5回 : 国際共通語としての英語を考える (1) : さまざまな「通じやすさ」、リンガ・フランカ・コア
- 第6回 : 国際共通語としての英語を考える (2) : 語用論的解釈、コミュニケーション・ストラテジー
- 第7回 : アクセントと言語態度 (1) — 人間の無意識の評価
- 第8回 : アクセントと言語態度 (2) — 評価、区別、差別
- 第9回 : L2英語の多様性と共通性 — コーパスからみるWEとELF (1) ICE, GloWbE
- 第10回 : L2英語の多様性と共通性 — コーパスからみるWEとELF (1) VOICE, ACE, ELFA

11. 第11回	： 「国際共通語としての英語」の指導－発想の転換を試みる
12. 第12回	： 言語コミュニケーション力の評価－WE、ELFの視点から考える
13. 第13回	： 「国際共通語としての英語」の社会的意義－英語帝国主義に焦点を当てて
14. 第14回	： 「国際共通語としての英語」の社会的意義－批判的応用言語学の観点から
15. 第15回	： 国際的／グローバル な英語の在り方（ディスカッション）

■授業時間外学修（予習・復習）の内容・時間(Preparation/review details and time)

授業の前後に教科書の該当箇所を読んでください。また授業時間外にさまざまな英語にふれられると良いでしょう。

■課題／課題に対するフィードバックの方法(Assignments/feedback)

課題①・・・重要概念の理解を確認するオンライン課題を行う（2回を予定）。

課題②・・・非英語母語話者の英語の視聴を行い、その特徴の記録とコメントを提出する。

課題③・・・日本や世界の英語のあり方に関してエッセイを書く。

■テキスト・参考書(Textbooks/references)

■ 教科書

柴田美紀・仲潔・藤原康弘（2020）『英語教育のための国際英語論－英語の多様性と国際共通語の視点から考える』大修館書店

■ 参考書

久保田竜子（2018）『英語教育幻想』ちくま新書

津田幸男（2006）『英語支配とことばの平等－英語が世界標準語でいいのか？』慶應義塾大学出版

■評価方法(Evaluation method)

授業参加/討議 30%

オンライン課題 30%

レポート & エッセイ 40%

■授業時間外の学生からの質問への対応(Responding to questions from students outside class hours)

電子メールで対応する（fujiwara@meijo-u.ac.jp）

